

教科又は教職に関する科目（初等教科研究）

担当教員：吉村直道・山崎哲司・大西義浩・日野克博ほか

## リアリティのある教材研究

保健体育講座・糸岡 夕里

### 1. 授業の概要

「初等教科研究」は、学校教育養成課程ならびに特別支援教育教員養成課程の3年生を対象に開講されている。対象学生は、附属校園での教育実習が終了した直後であり、授業を実践する難しさや自身の力量不足について痛感している時期である。

授業の流れは、第1回目にガイダンスを行い、受講生は前半、後半に設定された各教科より1教科を選択し各6回の授業を受講する。前半終了後の第8回目に前半教科のまとめを行い、後半終了後の第15回目に全体の総括を行う。授業は少人数単位の講義を原則とするが、初回、第8回、最終回は全体での授業を行う。

#### 【授業の目的】

教育実習前に受講した初等教科科目ならびに教育実習の経験を踏まえ、少人数での講義、実験、実技、模擬授業等を通じて、教科の専門的知識や技術を発展的に学習し、初等教科の教材研究や学習指導法について理解を深める。

#### 【体育科（前半6回）の到達目標】

体育科の授業における到達目標は、以下の2点である。

- 体育授業における教材研究の効果的な進め方について理解できる
- 体育授業における教師の効果的なかわり方について理解できる

#### 【体育科（前半6回）の授業展開】

第1回目の全体ガイダンスの後、第2回目より各教科に分かれ、少人数制での授業が展開される。受講生は、18名であった。表1は、前半6回における体育科の授業展開について示したものである。

体育科の1時間目の授業において、効果的な教材研究の進め方や教師のかかわり方について講義を行い、理論について学習を深めた。2,3時間目では、有効な教材について実践を通して学び、

4-6時間目では、1グループ3名で教材を考え、30分の模擬授業を行った。

4-6時間目における1授業の流れは、30分の模擬授業を2つ実践し、最後に2つの模擬授業について30分の省察を行った。省察では、毎回テーマを設定し、内容の充実を図った。

なお、教材については、小学校学習指導要領体育科の領域として設定されている「器械運動」「ボール運動」「陸上運動」「表現運動」の4つの領域から、学生の希望により選択した。その際、教材が重ならないようにすることと、多くても1領域2グループとなるように調整した。

新学習指導要領では、子どもの体力低下に対する課題解決に向けて、「体づくり運動」が小学校低学年より位置づけられ、重視されている。しかしながら、「体づくり運動」の領域では、運動学習というよりもむしろ運動経験を重視していることから、この授業の到達目標の1つである効果的な教材研究の進め方が若干異なるため、「体づくり運動」の領域は除くこととした。「保健」領域も同様に、運動学習ではないということから、対象から除いた。

表1 体育科（前半6回）の授業展開

回	日付	内容
1	10/22	効果的な教材、教師のかかわり方とは？
2	10/29	「器械運動」領域 マット運動の教材
3	11/5	「ボール運動」領域 ゴール型ゲームの教材
4	11/12	模擬授業①鉄棒運動、②マット運動
5	11/19	模擬授業③ネット型ゲーム、 ④ゴール型ゲーム
6	11/26	模擬授業⑤陸上運動、⑥表現運動

## 2. 授業の実際および学生の反応

受講生の中には、直前の教育実習で実際に体育授業を実践した学生とそうでない学生がいたが、それぞれに教師を目指して熱い情熱をもった学生であった。なかでも学生自身が体育に苦手意識をもっているからこそ受講したという学生 A がいたことから意欲の高さがうかがえる。

ここでは特に、学生 A の授業の様子について述べることにする。

2 時間目のマット運動の授業で A は、やはりできない技があった。そのときの A の姿は、まさに多くの子どもがつまずくポイントと同様であったため、ぜひ他の学生に、そのつまずきの姿を知って欲しいという筆者の考えから、みんなの前でやってもらうこととした。

本来、体育授業では、できない子どもに、みんなの前でやってもらうということは、子どもの有能感を減退させることから絶対にやってはいけないことである。そのことを学生へ指導しつつも、お互いに教師を目指す学生として、この場は特別であるということ A に納得してもらい、A の姿を全員で観察した。そこで、何ができていないのか、それができるようになるためには、どのような教材が効果的なのかを説明し、実践を行った。そこからは、指導する際に、どこをみればよいのか、どうすればできるようになるのかが明確となり、学生同士で教え合いを行っていた。そして最後に、A にもう一度みんなの前で同じ技をやってもらうと、見事に技ができるようになっていた。周りの学生からは自然と拍手が起こり、A は本当に嬉しそうであった。

これは、他教科にはない体育授業特有の感動体験である。自身のできないことができるようになった喜び、さらには、友達のできないことができるようになった喜びをクラス全員で共有することができるような学級づくりは、教科指導と合わせて重視されなければならない。

授業後の省察レポートで A は、「みんなの前でやらされて本当に嫌だったけど、最後できるようになって、本当に嬉しかった。このような体験を小学校の頃にできていたら、体育に対する苦手意識が違っていただかもしれない。私が先生になったら、今日のような授業をやりたい。そのためには、教材研究が本当に大切だと思った」と記述しており、自身ができるようになった喜びに留まらず、教師に向けての課題を明確にしていた。

4 時間目の模擬授業①で逆上がりを行った際、A は学習者役として授業を受け、逆上がりを練習していたが、最後まで逆上がりができなかった。事実、実践した教材では、教材解釈が不足していたことが否めない。そこで、次の模擬授業に入る前に、逆上がりの指導のポイントについて、筆者が指導し練習を行った。すると数回の練習の後、見事に逆上がりができるようになった。

その授業の省察の時間で A は、「できない子どもの気持ちを本当に考えて授業をして欲しい」と涙ながらに語った。できない悔しさ、恥ずかしさと、できないことができるようになった喜びを経験した直後に語られたそのリアルな言葉は、他の学生へ対して本当によい刺激になった。

6 時間目、最後の授業の省察レポートで A は、「体育は苦手だから、体育授業なんてできないと思っていたけど、そうではなくて、自分が苦手だからこそ、できない子どもの気持ちがわかるので、そのことを忘れずに、もっともっと教材に関する知識を深めていきたいと思いました」と記述していた。明確となった課題に対して、意欲的に取り組んでいくことを期待したい。

## 3. 今後の課題

最終授業後に、受講した学生に対し、この授業を受けた感想や要望について自由記述を求めたところ概ね肯定的な評価が得られた。

その理由として、模擬授業等を通して実践的に学べたことが多く書かれていた。特に、実際にできなかった学生ができるようになり、リアリティのある教材研究が実現できた。体育専修の学生にとっては、保健体育科教育法の授業等で体育の模擬授業を実施する機会を多くあるものの、その受講生は体育を得意とする学生であり、教材研究が不十分であったとしても学生のパフォーマンスの高さで十分にカバーされ、授業が成立してしまうという状況であったため、殊更である。

しかしながら、各 30 分の模擬授業 2 つに対し、省察の時間が 30 分しか設定できなかったことから、意見を交流する時間が足りなかったという意見が多く聞かれた。

授業者自身の教材設定の意図や、それを受けた学生の考え等、意見を深めていくことは、同僚性を構築していく上でもとても重要である。

今後は、模擬授業の時間や数、そして省察の時間を考慮し授業を計画することが課題である。